Arrange Line

水深無限風呂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ａｒｒａｎｇｅ　Ｌｉｎｅ

【Ｎコード】
Ｎ６９１５Ｚ

【作者名】
水深無限風呂

【あらすじ】
その世界には魔法や魔物などは存在しない。　そして、その代わりと言ってはなんだが“所持者が変態であればあるほど強力になる兵器（オリジン）”と、その所持者である《アレンジ》と呼ばれる脳姦趣味や眼姦趣味や死姦趣味などを持つ奇人、狂人、変態たちが平和に過ごしていた。　※エログロ要素（主にグロ）が強いと思います、精神的にキツい展開も多いかと思います、人がバンバン死ぬかもしれません。

０１ー予言的な（前書き）

この作品に登場する人物、団体は全てフィクションだと思います。

01－予言的な

――視線は空を漂っていた。

いや、正確には空を飛んでいた、鷹のように空を翔けていた。
見下ろすその景色は森。濃霧に包まれてもその広大さが伺える森。
その森は原始的な表情を浮かべはしているが、生気は何処にも感じられない。
言うならば人工的な原生林だろう。
そして、その森の地面は厚い雪の衣を羽織っていた。
これもまた、人工的な顔色を浮かべていた。
総じて、どれも原始的な姿をしているがどれ一つとして自然ではない。
全てが人工的に“０に戻された”そんな森だった。

――視線は空を進み、一人の少女を見つけた。

その肌は雪と同化しそうなほどに白く、また、その髪も同じであった。
ただ、その瞳は黄金色に爛々と輝いている。

――視線が白い少女に近寄ろうとすると、それを遮るかのように足音が原生林へと響き渡った。

カシャッ、カシャッ、という甲冑独特の音。
白い少女はその音に薄っすらと反応の色を示す。

「……やっと見つけたぜ、カミサマ」

――――視線が白い少女の次に見つけたのは、対照的な色合いの黒い少女だった。

その肌は白い少女と同じほど白いが、その髪と瞳は雨水に濡れた鴉のように黒かった。

「アンタの力をくれ」

――――黒い少女は不敵な笑みを浮かべつつ、白い少女へと声を掛けた。

白い少女は小首を傾げながらも、その細い両腕を一生懸命に伸ばす。

助けを求めるように、受け止めるように。

《ここまで辿り着くとは、やはり人間の欲は底が知れない、そして、それと同時に……興味も尽きない》

乱雑なノイズに飲み込まれた声。

黒い少女がその言葉に首を傾げるのも気にせずに、白い少女は細かに口を動かして言葉を紡ぐ。

「何言ってるかさっぱりだぜ。でも、その姿勢はＯＫサインってことでいいんだよな？」

《あなたには、私のすべてを貸し出すだけの価値がある、意義がある》

白い少女は更に両腕を伸ばし、黒い少女の手を取る。

黒い少女はその動作に思わず顔をゆがめ、残虐的な、それでいて

自嘲的な笑みを浮かべる。

「全部ぶち壊したいんだ、自己快楽精神に浸りきった、猿の延長線上に存在する二足歩行の愚物の全てを」

憎しみをぶつける様に、自戒をするように黒い少女は呟く。

《本当にあなた達は面白い。同属殺しに共食いに強姦に狩猟……何でもする。時には同属なのにも関わらず犬のようにすら扱う》

白い少女の手から淡い青色の光が漏れ始める。

《だから私は本当にあなた達が好きだし、それ故に知りたい》

黒い少女は、白い少女に触れて初めて少女の言葉を正確に聞き取れた。

「好きにしていいぜ、カミサマ」

ニッと笑う黒い少女。

その直後、黒い少女は淡い青色の光に埋もれ。

「どうせ、５８億分の１の命だからな」

———視線は、一気に引き戻される。

◆

急激に意識は覚醒した。そう、まるで急にスイッチをオンにされた玩具のように。

――――現状把握。ボクは今、何処で何をしている？
そう思って辺りを見回せば、大した加工もされておらずに『とりあえず板とかにしといた』と言わんばかりの手抜き具合が垣間見える素材で出来上がった壁、天井、床。……それと『とりあえず座れれば椅子っしょ？　椅子よりちょっと高ければテーブルっしょ？』みたいな手抜き具合が垣間見える椅子とテーブル。
そんな手抜き具合しか見えない場所で、ボクはテーブルを挟んで少女に顔をじぃっと覗き込まれていた。
……えっと……？

「……見えたか？」

ふと、ボクの顔を覗き込む少女がお前の戸惑いなど知るものか、と言わんばかりに話しかけてくる。
その少女は顔の造形や鼻の形、口の形からしてとても美しい顔をした少女だということが伺える。
……ただ、その目を覆う乱雑に白い目が無数に描かれた黒帯がなんとも不気味で、全部台無しにしている感がある。
なんとも残念だ。

「……まあ、はい」

しかし、残念がっていて無視するわけにはいかないので、一応適当に答えておく。
実際に何かは見えた気はするが、何が見えたかは分からないが。
だからといって嘘を吐くのも……なんだかナァ、といった感じだし。

「なんと！　見えたのか……！　これもさばきがみ様の賜物じゃ……、ああ、ありがたや……ありがたや……」

両手を丁寧に合わせてみたり、天を仰いでみたり……など相当なオーバーアクションを取りつつ嬉々たる様子で身振り手振りする少女。

しかし、ボクからしてみれば「さばきがみ様」って何ぞや？　といった感じなので、この少女が何故そこまで喜んでるのか一切理解できない。

「……さばきがみ様……とは？」

自分で理解できないなら、他人に聞けばいいじゃない。……といった風の過去の人間が残した素晴らしい言葉に従って、ボクは目隠し少女の発した聞き慣れない言葉について問う。

すれば、少女は大きく目を見開き（目の部分は隠されて見えないので推測だが）、驚愕の色を隠しもせずに顔全体にこれでもかというほど“お前、そんなのも知らないのかよ？　何なの？　外人？”みたいな雰囲気を表す。

……目は口ほどにモノを言う、なんて聞いたことがあったけど……この少女の場合は目を見ずとも顔全体が口ほどにモノを言っている。……恐らくは嘘とか簡単に見破られる人種だろう。

「貴公……、さばきがみ様を知らんと言うか……！？」

「ええ、まあ……それとボクは貴公ではありません、女です」

若干トーンを下げて言う。……今のうちに言っておこう。ボクは女だ。

よって、貴『公』ではない。うん。

「あ、ああ……」

ボクの言葉に何か衝撃を受けたらしい少女は顔を真っ青にして震えだす。
……ボクが女だということがそこまでショックだったのか。
おもいっきり傷ついた。多少とかじゃなくておもいっきり。
でもまあ、ショックを受けられたとしても、ボクが女だということが理解されたなら……、詫びの言葉が二、三個あればそれでいいか。

「なんと嘆かわしいことか！　このようなことが古今東西あっていいことか！？　いや、ならん！　待っていろ、今すぐ私がさばきがみ様がお見えになるように説得してこよう！！　……ナニ？　お前程度にできるのかだと？　ナァニ、この私にすべて任しておけ！貴公はそこでバカみたいに口あけて突っ立ってるだけでいい！　ワハハハハハハ！！」

だがしかし。
ボクの予想していた反応とは１８０度……というか、もはや違う路線の反応を身振り手振りの相変わらずダイナミックな仕草をしつつ、返してくる目隠し少女。
……聞いちゃいねえ……。
それとバカって言ったぞ、コイツ。……バカってお前……。

「いや、別にいいんですけど……って、もういないし……」

面倒ごとのニオイしかしなかったので断ろうと思ったが、それよりも早く先ほどの少女は尻尾のように結われている変わった形の装飾を揺らしながら奥へと行ってしまう。
結われているテイルってか。……やかましいわ！
というより、何とも面倒な……。
……今のうちにばっくれてしまおうか？　とも考えたが、それは

それで人間としてどうかしていると思うので待つことにする。
というか、正確に真っ直ぐに走っていったことを考えると恐らくあの少女は眼が見えているのだろう。
……なんで見えるんだ……あぁ、アレンジだからか……。
いや、ソレを思い出すのはやめよう。欝になる。
……しかし、なんでこうなったんだかなぁ……。
……まあ、理由は一つしか思い当たらないけどさ。

「待たせたな貴公！」

そしてその理由を思い出す暇すらなく先ほどの少女は戻ってきた。
速いっ！？　赤くないのにボクの親友の三倍は速いぞ、こいつっ……。
……ボクの親友がのんびりしてるだけですか、そうですか。

「待ってないです、それと貴公じゃないです。ボクは女です」

再び貴公と呼ばれたのに思わずムッとし、トゲのある言葉で返してしまう。

「そう隠さずともいいのだぞ、貴公！　安心しろ、貴公が今にも嬉々のあまりに踊りだしそうなのは分かっておる！」

ノーダメージどころか無効化された。そして再び貴公と呼ばれてボクのみがダメージを受けた。
……理不尽だ。

「アンタ、人の話聞かないクチですね？」
「サァサ！　入った入った！」
「聞けよッ！！」

ボクの悲痛な叫びも空しく、目隠し少女はボクの背中をグイグイと押し込んでいく。
……目は見えてるのに耳は聞こえてなかったのか……。普通逆じゃないか？　……あぁ、アレンジだからそれでいいのか……。
といった感じに、内心諦めたボクは目隠し少女のされるがままになり、先ほどまでいた手を抜かれた場所しか見当たらない部屋から奥へと進んで、そこ等の部屋と大して変わりない……が、多少……大体1．5倍ほど他の部屋より大きい部屋に数十秒ほどで辿り着く。
……ふむ、どうやら外見通りの広さのようだ。どうにも“さばきがみ様”は空間を操ったりできる人ではないようだ。一安心。
ヒンシュクを買って雪原のど真ん中にでも飛ばされたらどうしようかと肝を冷やしたが、杞憂で済みそうだ。
……そして、ここが本当に“さばきがみ様”とやらの部屋なのだろうか。そうなのだとしたら教祖のワリには随分と質素な部屋だ、……どうにも成金主義ではないらしい。……いやまあ、別に教祖＝成金詐欺っていう偏見があるワケじゃないけどサ。
まあ、少しだけ好感が持てる。……まだ顔も見てないが……。

02 ― 教祖様

「マトモな顔するアレンジは粗製か本物のどちらかだけだ」
――――変死を遂げたアレンジ専門の心理カウンセラーが最後に残した言葉。

◇

「さばきがみ様！　件の男をお連れしましたぞ！」

部屋に入って第一声がコレだよ！

「あのぉ、すみません、ボク女なんですけ」
「この屈強な男！　丸太のように太い腕！　厚い胸板！！　何とも素晴らしい男だと思いませんか！？」
「聞こえてないだけじゃなくて見えてすらいなかったのか……」

ボクの腕細いし、胸は薄い。
もう一度言えば、ボクの腕は細いし、胸も薄い。
そんな屈強な姿はしてない。
そしてやはり見えてなかったのか。更には聞こえてもいない……。
彼女はどうやって真っ直ぐ走ったのだろうか？　そしてどうやってこの部屋へと辿り着いたのだろうか……？
……ボクの背中にどうやって回れたのだろうか……。
アレか、霊的な力が働いているのか。そうに違いない、そうとしか考えられない。
……いや、アレンジだからか……。アレンジって便利な言葉だね。この一言で快楽殺人者から政治家まで全てを表せる。うん、便利。

「……申し訳ありません、どうにも私の部下が御迷惑を掛けたようで……」

呆れたのと、目の前に姿を現した不可思議な少女について考え耽っていたせいで、何も言えなくなっていたボクに“さばきがみ様”……らしき黒髪の長髪に、解けた金属のようなオレンジ色の瞳をした少女が詫びを入れてくる。

おい、教祖様に頭下げさせてるぞ、目隠し少女よ。それでいいのか、目隠し少女よ。

というか可愛いな、教祖様……。こんな移住民族を牛耳ってる宗教の教祖ならもっと威厳のありそうなお爺さんだとか、ボロボロになった聖女サマだとかそんなんだと思ったけど……。

普通の町娘っぽいぞ。そして短めのスカートから除く生足が艶かしいぞ、肌をそんなに出していいのか教祖様よ。

「サァテ、貴公！　その目に焼き付けるがよい！　これがさばきがみ様のお姿だ！　麗しいだろう！　可愛らしいだろう！？　この方の百本の腕は百人の罪人を同時に裁き！　百の瞳は百人の人間の罪を見抜くのだ！」

急に大きな声がして驚いて、何事かと思って振り向けば、目隠し少女が壁に向かって演説をしていた。……相変わらずの身振り手振りを加えて。

……しかもそのアクションには先程までより随分と熱がこもっており、魂の演説だということを体現している。

ヤバいのではないだろうか、あの少女。……何がヤバいって聞かれれば……。ほら……、そりゃ、主に脳とか。脳とか、脳とか……。

「……まあ、その脳足りんは少し放っておいて。……私も待ち人が来るまでは暇ですし、折角ですから少し……お話しませんか？」

呆れを通り越して一種の感心を覚え始めたボクへと“さばきがみ様”が遠慮がちに声を掛けてくる。
どうにも彼女は脳に異常があるのではなく、脳が足りてないらしい……。
結構酷い言葉だ。

「脳足りんって……結構酷いですね」

思わず胸の内にしまっておこうと思っていた言葉を発してしまう。
……ちなみに脳足りんとは、考えが足りないこと、知慮が浅いこと、脳が足りないこと。阿呆……の意味……だったと思う。
あと、ボクは“馬鹿”の数十倍以上相手の頭を自分の下に見る言葉……だと自己解釈をしている。

「いいんですよ、その子、聞いてませんし見てませんから」

ボクの言葉に対する“さばきがみ様”の心底ウンザリするかのような声。
……なるほど。妙に納得できる。
でもそれは極端に言えば、弾丸が通らないのなら人に銃を向けていいと言っているようなものなんじゃないのだろうか。
それでいいのか、さばきがみ様。何か間違ってないか、さばきがみ様。

「さて……、まずは無難に自己紹介でもしましょうか。私の名前は逆坂美羽（さかざかみう）……、であると同時に、この裁忌蛇（さばきだ）教の教祖であり、唯一神である“さばきがみ”でもあります。どうぞ、よろしく。……あ、ちなみに裁忌蛇とは『裁かれるべくは忌々しい蛇』と書きます。ここでの『忌々しい蛇』とは他の生命を丸呑みにする強欲にして貪欲

な蛇の如き罪人を示し、『裁く』とは私……つまり“さばきがみ”による生物に与えられた平等な罰の執行の即行を示しています」

儚い笑みを浮かべつつ、つらつらと自分に関する情報と要らない裁忌蛇教の情報を述べていく“さばきがみ様”……サカザカさん。

自分のこと神って言っちゃったよ、この人。……ああ、この人もアレンジなのか。

……しかも前半はまだ理解できるけど、後半は遠まわしに……というかワリとダイレクトに『殺す』って明言してるじゃないか。

恐ろしい団体だ。まあ……血の気が多くて狂人しかいないアレンジのことだし……ワリと普通なのだろうか。

……ちなみに今日その血の気が多くて狂人しかいないアレンジにボクもなる……ということは思い出すと泣きたくなるので思い出さないことにする。……思い出したけど……。

「サカザカ……ミウ……、南の方（サースレミア）の出身なのですか？」

内心はグチャグチャでもう何もかもがイヤになってきたが、それを振り払って平常を装いつつ、それなりな返答をする。

「あら、お分かりになりますか？」

意外そうな表情を浮かべながら疑問系に疑問系で返してくるサカザカさん。

……疑問系を疑問系で返すのはどうかと思うぞ、サカザカさん。

生まれは意外と庶民なのか、サカザカさん。

「ええ、まあ……。名前が二つに分かれてる人は大体南の方（サースレミア）の人ですからね。……それにほら、聖職者の方は大体が南の方（サースレミア）の生まれじゃないですか」

……“サースレミア”。東西南北に位置する四大大国が一国。通称『聖職者のサースレミア』……または『善人気取りの国』。……あるいは『右にならえ大国』。

その通称が示すように、様々な宗教家達が集って“全ての神すらをも司る神”と呼ばれる《原初の人形（プリミティブ・ドール）》という神（アレンジ）を主軸とすることで平和的な国作りを目指している国だ。

……この《原初の人形（プリミティブ・ドール）》と呼ばれる存在が現れる以前は宗教家同士の内戦が絶えずに、血みどろ大国なんても呼ばれていたけど、今ではその面影もない。

しかし、今でこそ国の安定化は成功こそしているものの、今では無宗教家が増え始め、国の将来は灰色らしい。

何とも安定しない国である。

……まあ、国が不安定になったときに破滅を人は予感し、再び信仰心を取り戻すだろうから……。滅びそうになったらまた以前みたいな宗教家だらけの国に戻るのだろう。

原始的なモノほど繰り返すってのはこのコトかな。……まあ、幼稚（プリミティブ）な人形（ドール）なんていうものを信仰してるぐらいだし。そんなものだろう。

「うふふ、それもそうですね」

なんて風にいろいろ考えるボクのことなど知ったことかと言わんばかりに、目を細めて笑いつつ、肯定するさばきがみ様……こと、サカザカさん。

おぉ、中々に様になっている。

……神々しいっていうよりは艶かしい感じだけど。

「で、あなたのお名前は？」

そこでサカザカさんは話の路線を九十度に変えてくる。
無論応えることにする。というか名前を聞かれて応えないのは人殺しだけ、というボクのジンクスが存在するので、やはり応える。

「ああ、ボクですか。ボクはハヤトっていいます」
「ハヤト……、中々に可愛らしいお名前ですわね」
「……そうですか？　ボクは男っぽくてあまり好きではないんですが……」
「名前だけなら確かに男性のようですが、……あなたのその可愛らしい外見と合わされば可愛らしい名前に聞こえます」

またもや目を細めつつサカザカさんは楽しそうに喋る。
……それにしても、初めてだ。
ボクの名前を『可愛らしい』なんて言った人は……。
思わず好きになってしま……ハッ！？　まさかこれが洗脳力か！　こうやって教団を広げていくのか。なるほど……。
……騙されんぞ。ボクのジンクスの一つにこういうのがあるんだ。
『《愛している》という言葉と《自分を褒め称える人間》に深い信頼を抱くな』ってね。
間違ってはいないだろう。たぶん。

「まあ、そう言ってもらえると嬉しいですね」

なので、そのジンクスに従って素っ気無い返事を返す。
……うむ、我ながら完璧だ。

「あら、中々にドライな反応……」

残念がるような、それでいて予測していたような得意げな表情を浮かべるサカザカさん。

……む、これは大してダメージを与えていないな、追撃するしかない。

「男っぽいでしょ？」

「そんなことありませんよ」

即答か、中々に出来る人だ。

まぁ、どうでもいいワケだが……。

「さて、そういえば……あなた、見えたらしいですね」

「あ、はい。まあ……」

次はどんな追撃を掛けようかと考えていたところ、サカザカさんは妨げるかのように話題を変えてきた。

クッ……やりおるわ。

ちなみに先ほどから言われる『見えた』とは何かと言えば、この施設……裁忌蛇（アレンジ）教の信者のみで構成された移住民族（キライバ）の『千里眼屋（せんりがんや）』という施設では、“千里眼”と呼ばれる能力持ちのアレンジが客に対して……こう、なんかして……こう、何か見える人は見えるらしい。……アレンジのことだからよく分からない。もしかしたら脳をハッキングされてたり……やめよう。怖くなってくる。

しかしまああ……何が見えるかは知らないし、ボク自身何が見えたかは分からないが……、こう、何か……記念に……。

わからないかい？　こう、なんか……、あると入りたくなるだろう？　なるよね？

そんな感じで、入ってみたらコレだよ。

……今度からはあまり怪しいところには入らないようにしよう。

「どんなモノが見えましたか？」

「どんなモノと言われても……ボク自身、よく覚えてないんですよ。

でもまあ、見えましたよ。何かは」

何か、白い光景だった覚えはうっすらとある。

あと既視感（デジャヴュ）を多少感じた、何処かで見たような光景だった気がする……ような、違うような……。

とりあえずそんな感じだった。

「……まあ、そんなものでしょう。……と、……そろそろ私の待ち人も戻ってくる頃でしょうし……。長居させてしまったことと、私の部下の無礼講をお許しください。短かったですが、とても有意義な時間でした」

ボクの答えが気に入ったか、気に入らなかったのかは分からないが、急にサカザカさんは遠まわしに『帰れ』と言ってきた。

……むぅ、中々に変わった人だ。

そしてついでに言わせてもらうと、ボクは終始立ちっぱなしだった。……まあ、こんなものか……。

もう少しサービスしてくれてもよかったんじゃないかと。せめて椅子ぐらいは……。

「そうですか……、では、こちらこそ長居してしまって……すみません」

「あ、待ってください……つまらないものですが、どうぞこれを」

内心不満を垂れ流しにしつつ、部屋を出ようとしたところで、サカザカさんはボクに“おまもり”のようなモノを手渡してきた。

「……これは？」

「我が裁忌蛇教のおまもりです。私の力がこもってますよ、たぶん」

……たぶんって……。
そんな曖昧な……、それとサカザカさんの力がこもってたらどうなるのだろうか……。
……まあ、おまもりなんて気休めにもならないほど効果の無いアクセサリーのようなものだし……。
何かを期待するだけ無駄か……。

「でも、何故？」
「それはアレですよ。ほら。……あなたは今から、遺跡に潜るのでしょう？」

その言葉を聞いた途端。ボクの頭は釘がたくさん刺さった木の棒で叩かれたような衝撃を覚える。
あ、あぁ……。そうだった……。それで現実逃避に千里眼屋（こんなところ）に入ったんだった……。

「……それを思い出させないでくださいよぉ……」
「あら……この話題は不味かったですか？　でも大丈夫ですよ、遺跡は下手すれば死にますが、下手をしなければ死なないところですから」

何のフォローにもなってない……。
……ちなみに“遺跡に潜る”というのは、ボクの住む村……というか、この世界の何処でも最年少で１０歳……一番遅くても１６歳の誕生日に行われてるであろう儀式だ。
どういう儀式かといえば、遺跡の最深部まで進み『何とも表せぬ存在』とか呼ばれてる『何か』から“オリジン”というものを授かって、先程から何度も口にしている“アレンジ”になる……といったものだ。
ちなみに、オリジンが何だとかアレンジが何かと言えば変人と狂

人と変態、そしてそれを覚醒させる道具だとしかいい用がないのだが、詳しく説明すると――――。

「ハヤトぉー？」

――――聞こえただろうか、今のが件のアレンジの声である。
ボクはそのアレンジの姿を捉えるべく声のした方向……つまり、背後を確認する。

「ああ、やっぱりアキラか……」
「む、何その嫌そうな顔」

確認した背後には若干紫がかった黒髪をポニーテールにし、不満そうな表情を浮かべる少女がドアから部屋の中を覗いていた。
彼女の名前はアキラという。ボクとの関係は俗に言う幼馴染ってヤツだ。
また、小さい頃から“アキラ”と“ハヤト”という男っぽい名前という繋がりだけで仲良くしている仲でもある。
……ちなみにここでは最近アキラの上半身の腹部より上にあって肩から下にある、あの部分の女性的な憎いアレが成長してきて男っぽくなくなってきたコトについては何も言わない。
……妬ましい。あんな脂肪の塊……焼け落ちればいいのに。

「私はハヤトが心配だから見にきたって言うのに……」

だが、そんなボクの心境など知るものかと言わんばかりに、若干俯いて独り言気味にぶつぶつと愚痴り、更には上目で睨んでくるアキラ。……くぅ、我が幼馴染ながらなんて可愛さだ。もはや男っぽいのは名前だけじゃないか、チクショウめ。

「あー……ハイハイ、ごめんね、悪かったよ。……じゃあ、失礼します」

未だにジト目でボクを睨みつけながら“料理は教えてもしない”だとか“もう少し家事に意欲的になれ”だとか耳に痛いことを言い続けるアキラの背中を押して、苦笑いを浮かべるサカザカさんから逃げるように“さばきがみ様”の部屋を出る。

……まあ……。

……ともかく、ボクは未だに壁に向かって熱演を続けている目隠し少女を傍目に“千里眼屋”を出た。

……そしてその際に、ふと気になったが、いつまで目隠し少女は演説し続けるのだろうか……。

いや、恐らくは世界の終わりまで演説し続けるのだろう……。アレンジだし……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6915z/

Arrange Line

2012年1月5日18時51分発行